

位置限定匿名掲示板の活用：大学講義での応用を例として Utilization of Location-based Anonymous Bulletin Board System: Lessons Learned from Lectures in a University

飯尾 淳[†]

Jun Iio

1. はじめに

Facebook や Twitter を代表とする最近流行のソーシャル・ネットワーク・サービス (Social Network Service, SNS) や古くからある電子掲示板システム (Bulletin Board System, BBS) など、ネットワークを介してユーザー同士がコミュニケーションを楽しむためのシステムはこれまで数多く提案され、また、普及してきた。普及が進むとともに、リアル空間 (現実社会) とは別のサイバー空間 (ネット言論空間) とも呼べる世界が発生し、そのなかで数多くの議論がなされてきたが、リアル空間で起きている事件や事象についてサイバー空間で議論が不適切に拡散される炎上現象[1, 2]だけではなく、ネット空間での議論や人間関係のもつれから殺人事件にまで発展するなど、リアル空間とサイバー空間の両方において社会問題が発生している。

筆者らは、自由な発言を促す匿名掲示板の利点と、位置限定的なコミュニケーション機能を組合せた新しい電子掲示板システムの開発[3]を行っている。このシステムでは、位置に紐付けられた匿名の発言ゆえに、不適切な発言があったとしても (そこから炎上が発生しかけたとしても)、不適切発言が拡散しない、すなわち、炎上が延焼しないという特長を持つ。本稿では、同システムの位置付けと特徴、目的などについての概要を紹介し、活用例として、大学の講義で使用してみた例を報告する。

2. 匿名性と炎上の問題

SNS や BBS あるいは一般消費者が気軽にコメントを投稿できる消費者参加型メディア (Consumer Generated Media, CGM) のいずれにしても、その発言に関して発言者を特定できるか否かによって、システムあるいはサービスを分類することができる。

2.1 匿名性の観点からの分類

まず、メッセージの発信者をリアル空間の個人と紐付けることができるかどうかの観点から、これらのシステムを以下の3段階に分類する。

2.1.1 実名投稿型

システムはアカウント登録が要求され、そのアカウントでログインすることによりメッセージの発信が可能となる。さらに、アカウントは基本的に実名でプロフィールを表示することが運営から義務付けられる。実名でのプロフィールが求められているということは、サイバー空間での発言、メッセージの投稿が、リアル空間での個人と結び付けられることに繋がる。すなわち、実際にリアル空間で生活する個人として、責任をもった発言やメッセージ投稿が促されることになる。Facebook はこのタイプに類型される代表的な SNS といえる。

2.1.2 半匿名投稿型

メッセージを発信するためにはシステムへのアカウント登録が必要である点は実名投稿型と同様であるが、そのアカウントのプロフィールは必ずしも実名表記を求めないタイプのメディアである。ハンドルと呼ばれるニックネームを使用し、サイバー空間では実名の誰それではなく、ニックネームの X 氏という扱いで周知される。このようなケースでは、発言者がリアル空間の誰かは不明である。

参加者の意志によってはニックネームではなく実名で参加することも可能である。また、何らかのきっかけによって、あるいは発言を丁寧にプロファイリングすることにより、リアル社会の個人として発言者が特定されてしまうこともある。このタイプの代表的なものとして Twitter がある。

2.1.3 匿名投稿型

メッセージを投稿する際に、アカウント登録は求められないタイプである。アカウント登録は必要だがメッセージにアカウントが紐付けられないものもある。このようなメディアでは、匿名で自由に発言することができる。システムによっては、投稿者の自由意志により実名あるいはニックネームを用いて名乗ることができるようなものもある。なお、このようなものであっても「なりすまし」や「自作自演」を防ぐため、ランダムな文字列を用いた ID を表示するものもある。ID は、通常、発信元 IP アドレスなどから一意な文字列が生成され、匿名といえどもある程度の発信者識別を可能とすべく利用される。5ちゃんねる (旧: 2ちゃんねる) やはてな匿名ダイアリーなどはこのタイプとして考えられる。

2.2 炎上の発生リスクと投稿の自由さ

実名投稿型のシステムでは、発言にリアル社会での個人としての責任が付随する。それにより不適切な発言は行われず、炎上の発生は抑制される傾向にあるが、一方で、発言の自由さもまた抑えられがちである。

半匿名投稿型のシステムでは、発言者が特定されるリスクを伴いつつも、リアル社会の個人とは基本的に切り離されているゆえに、無責任な発言も多い。そのため、炎上や、さらには名誉毀損などの刑事事件化を防ぐためにブロック、ミュートといった機能¹が活用されるだけでなく、ときとして、運営側への報告に基づきアカウント停止措置がとられることもある。

匿名投稿型のシステムは、ある種の無法地帯ともいえる。ID を用いた自作自演の抑止など最低限の炎上防止策はとられているが、基本的には無責任に発言できるため、ときとして不適切な発言の応酬が発生する問題がある。その結果として炎上や刑事事件化などの極端な社会問題に至るケー

[†] 中央大学 Chuo University

¹ これらの機能は実名投稿型メディアにも搭載されることが多い。

スもある。なお、いくら匿名といっても IP アドレスなどから発信者を特定することはある程度は可能なため、これらについては公権力が介入することもある。このようにリスクの高い匿名投稿型メディアではあるが、発言に責任が伴わないゆえに、気軽にメッセージを投稿できるという利点も併せ持っている点は強調しておきたい。

3. 位置情報利用の匿名掲示板 Soco

実名か匿名かでリスクと自由のトレードオフが存在する。炎上や事件化のリスクを回避しつつ、一方で、気楽に発言できるようなシステムとして、我々は「Soco」と名付けた位置情報利用・匿名掲示板の開発を進めている。

Soco は基本的に匿名でメッセージを投稿できる電子掲示板システムであり、メッセージを発信するためにアカウントの登録は要求しない。Web アプリケーションとして実装されており、Web ブラウザからアクセスすることでメッセージの閲覧と投稿を誰でも行うことができる。

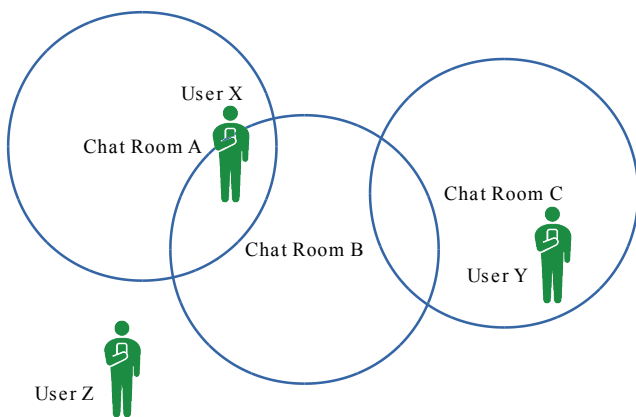


図 1 Soco における位置情報の活用

Soco における位置情報の活用に関する基本的なアイデアを図 1 に示す。類似の電子掲示板システムと同様に、Soco には部屋（チャットルーム）と呼ばれるコミュニケーションスペースが設定される（Soco 最新版ではハッシュタグ機能で代替されており、部屋ではなく各メッセージが位置情報と紐付けられて整理されるように改良されているが、本稿ではオリジナルのアイデアに基づいて整理する）。

一般的な電子掲示板と同様、部屋は特定のテーマで分類され、そのテーマに沿ったコミュニケーションが部屋内では行われる。一般的なものとの相違点は、部屋が、その部屋を作成した時点における「その部屋を作成した端末が持つ位置情報」に紐付けられているという点である。その部屋へは、アクセスしようとしている端末が、部屋に紐付けられた位置を中心とした一定の距離内に存在しないとアクセスすることができない。

図 1 に具体的な例が示されている。図 1 において、ユーザー X は、部屋 A および部屋 B のアクセス可能な範囲に含まれているため、A と B の部屋にはアクセスすることができる。したがって、部屋 A もしくは部屋 B での議論に参加することができる（それぞれの部屋に投稿されたメッセージを見ることができ、それぞれの部屋にメッセージを投稿することもできる）。また、ユーザー Y は、同様に、部屋 C にのみアクセスすることができる。一方、ユーザー Z はどの部屋のアクセス可能エリアにも含まれておらず、どの議論にも参加することができない。

4. 大学の講義における Soco の利用

その場に行かないと議論に参加することができないという Soco の特長は、自由な発言を容認しつつ、炎上が延焼しないという利点を持つ。そこで、大学の講義での活用を進めるべく、現在、いくつかの講義で試行している。

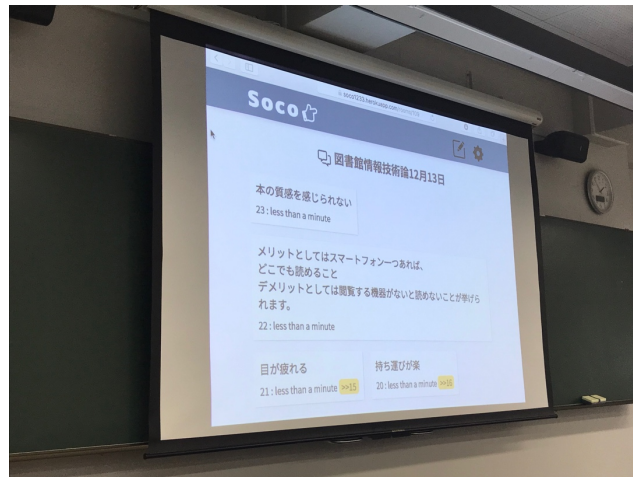


図 2 大学の講義における Soco の利用

図 2 は、大学の講義で Soco を使用している様子である。このケースは、教員が受講生に対して質問を出し、それに対する回答を Soco で提出せよと指示した後の状況である。

教員が「質問があれば説明の途中でもよいので挙手して質問せよ」と指示しているにもかかわらず、学生はなかなか手を挙げて質問することはない。学生に尋ねると、この程度のこともわからなくて恥ずかしいという気持ちや、自分が質問することで講義の流れを止めてしまうことへの遠慮などが働くとのことである。それに対して Soco を使うことで気兼ねなく質問や意見を言うことができたという評価が、学生から得られている。

5. おわりに

本稿では、SNS や BBS などのコミュニケーションサービスに関して、実名で参加するか、匿名あるいは半匿名で参加するかによって、炎上や社会問題化するリスクと気軽かつ自由に発言、投稿できるメリットがトレードオフの関係にあることについて議論した。この関係を踏まえ、炎上を阻止しつつ自由に発言できるプラットフォームとして、位置情報を利用して物理的な距離で限定したアクセスを提供する電子掲示板システムである Soco を提案した。

実際に、Soco のシステムを大学の講義で活用し、その効果を確認した。対面ではなかなか発言を躊躇する学生も、匿名で発言できることから Soco 利用で発言の頻度が増加した。なお、受講票に書かれるコメントからは、Soco に対して好意的ないくつかの評価が得られた。Soco はまだ現在も改良を加えている。定量的な評価が今後の課題である。

参考文献

- [1] 飯塚 重善, 小松原 明哲, “ソーシャルメディアにおける情報発信者の意図しない拡散事例”, 信学技法, 113(426), 165-169, (2014).
- [2] 山口 真一, “頻発するネット炎上の正体: 1 億総発信時代が到来情報社会の未来”, メディア展望 (670), 1-5, (2017).
- [3] Iio, J., Asada, S., and Kai, M., “Anonymous Accessible Bulletin Board System with Location Based Access Control Mechanism,” WSSM2018, (2018). [To Appear]